

至仏山東面登山道利用実態調査報告書
兼 笠ヶ岳登山道調査報告書

2004年7月調査

NPO 尾瀬自然保護ネットワーク

平成16年11月

至仏山「東面登山道利用実態調査」報告書 兼「笠ヶ岳登山道調査」報告書

NPO尾瀬自然保護ネットワーク

理事長 高橋 喬

担当理事 永島 勲

はじめに

至仏山東面登山道は、植生の保護・登山道の整備・植生の復元等の理由で、平成元年から閉鎖されていましたが、平成9年8月1日に9年ぶりに閉鎖が解かれてしまいました。

ネットワークでは、平成9年8月に第1回の調査を行い、以降毎年夏に継続して実態調査を実施し、再開における問題点を指摘してきました。さらに、残雪期の登山道閉鎖期間中（5月中旬～6月末）の利用実態調査も平成10年5月に実施いたしました。

至仏山は蛇紋岩という特異な地質により、森林限界は1700メートルと低く高山植物の宝庫としても知られています。さらに、至仏山は交通の便も良く折からの登山ブームと深田久弥の日本百名山としても有名で、年々登山者が増加しています。このため、登山道を外れて歩く入山者の踏み付けによる植生の破壊や裸地化の拡大と安易な入山による怪我人が毎年発生しています。

さらに、今年は東面登山道調査と併せて平成13年度に続いて2回目となる「笠ヶ岳」周辺の登山道の荒廃状況等の調査も行いました。

以下、平成16年度の至仏山東面登山道利用実態調査結果と笠ヶ岳登山道調査結果を報告いたします。

記

- 、実施日 平成16年7月9日（金）～11日（日）
7月10日：至仏山東面登山道を調査 / 天候：晴れのち雷雨
7月11日：笠ヶ岳登山道を調査 / 天候：雨

- 、調査場所 至仏山東面登山道（至仏山頂～山の鼻 2.9Km）
調査時間：鳩待峠発7:30～山の鼻8:20～D地点（標高1800m）10:08
10:38～高天ヶ原11:58（昼食25分）～至仏山12:40（休憩15分）～小至仏13:45～待峠着15:20（鳩待山荘泊り）
笠ヶ岳登山道（オヤマザワ田代～笠ヶ岳 6Km）
調査時間：鳩待峠発7:10～オヤマ沢田代8:45～小笠10:00～笠ヶ岳東肩10:35
10:45～笠ヶ岳11:15～山頂への分岐点12:10（昼食25分）～オヤマ沢田代13:35～鳩待峠着14:45

(注)雨天につき片藤沼周辺の調査は行いませんでした。

- 、調査者 永島 勲(本会理事・自然保護指導員、埼玉県児玉町)
松前雅明(本会自然保護指導員、福島県郡山市)
西山伸一(本会自然保護指導員、神奈川県横浜市)
藤田英忠(本会自然保護指導員、新潟県豊栄市)

、調査内容

1. 東面登山道の整備状況

今年の調査は、昨年と同じ山の鼻から東面登山道を登り至仏山頂に至るコースとしました。樹林帯の中の深くえぐられた道(場所によっては1メートル以上も深く掘り下げられている)は、一部ではあるが里から運び込んだと思われる大小さまざまな石が周りと同じ高さに埋められている。一部ではその上を蛇籠の様に金網で覆ってある。このため、雨天でも濁流に足元を洗われることもなく、石も年々安定して格段に歩き易くなってきている。

森林限界を越え蛇紋岩帯に入ると石詰の丸太階段や大きな岩石のゴロゴロした歩きにくい道になる。尾瀬のような厳しい自然環境下では、雨水等による土壌の流失で登山道がえぐられて岩石の露出したコースを整備し、植生を復元するのは並大抵のことではないと強く感じました。(写真 至仏 6を参照)

東面登山道は急傾斜地のため木製の階段が多数設置されているが、雪の重みで傾いてしまったものも多く、このような階段は下山のときはバランスがとりにくく危険である。さらに、濡れた階段はスリップしやすく危険度は一層高くなります。(写真 至仏 5を参照)

東面登山道には、植生の保護や土壌の流失防止用に、金網に石を詰めた「蛇籠」や「材木や丸太」が多数設置されていて、土壌の固定や安定にある程度の効果は認められるが、荒廃地の大きさから比べて設置数が少なく、雨天時の土壌流失防止ではその効果は十分とは言えない。(写真 至仏 - 4の1を参照) 登山道外(植生地)への立入りを防ぐために杭とロープが登山道沿いに設置されているが、杭は倒れロープはたるみ、その役目を果たしていないところが多い。(写真 至仏 - 4の2を参照)

2. 植生復元状況(D地点)

標高1800メートルの「D地点」(その形から通称「南米大陸」と言われている)下部の南側は雨水の流路になっていて荒廃が一番深刻である。(写真 至仏 1を参照) D地点下部では地中の岩盤が露出し、その面積も年々拡大している。土壌流失防止の丸太囲いは浮き上がってしまっている。(写真 至仏 2を参照)

しかし「D地点」最下部では蛇紋岩で囲まれた棚田のような僅かな平坦地にミタケス

ゲと思われる発芽した淡い緑色の苗が観察できた。苗は高さ5～6cmほどで、毎年同じような生育状況なので、順調に发育しているとは思われない。その中にジョウシュウオニアザミも見られた。(写真 至仏 3の1、3の2、3の3を参照)

3. 入山者の利用実態

東面登山道は、下山に利用する人が圧倒的に多いが、今年は登りに利用している人も相当数いた。その中に「片品村ガイド協会」引率による中高年の登山グループ(3班に分かれ30名程)もあり、自然解説を受けながらの登山をしていた。

今年も多数の登山者とすれ違ったが、一様に「歩きにくい」とか「スリッパしやすい」などと言いながら、靴やズボンを泥んこにして下っていた。狭く滑りやすい箇所ではスリッパに注意して慎重に歩くため時間を要し、渋滞が発生するほどであった。

標高2000メートルの高天ヶ原の展望テラスは、お花畑の中にあり休憩場所として絶好の位置にある。木道を挟んで二つあるテラスは昼食をとる登山者で満員、座れない人も出るほどであった。テラスの端に腰を下ろして高山植物の上に足を投げ出している人もいたので、注意すると皆素直に従ってくれました。

12時40分、至仏山頂に到着。山頂も登山者が多い。ほとんどの人が昼食中であった。ざっと数えて40名程はいた。ゴミは見あたらない。13時を過ぎても登山者は登ってくる。早々に山頂を後にするが、西から黒雲が近づき程なく雷鳴が轟く。次第に風も強くなり、小至仏との鞍部手前で雷雨に襲われた。

小至仏山頂付近では雨具を付けない軽装のグループ登山者を見る。雨具を着けるよう指導したが、無視してそのまま行ってしまった。小至仏山頂を越え稜線の南側に出るまで北西からのガス混じりの強い風が止むことはなかった。

2日目の笠ヶ岳ではオヤマザワ田代から先で出会った登山者は8名。雨天のためか、非常に少なかった。大半がしっかりした装備であったが、ビニール製の簡易雨具の人を一人見かけた。尾瀬でも笠ヶ岳まで来る人は、服装や装備を見ても登山経験者が多いと感じました。

4. 笠ヶ岳の登山道の状況

8月11日は朝から雨。オヤマザワ田代で至仏山へのコースと分かれと登山道は急にぬかるみの多いと道が変わる。悪沢岳を過ぎると笹も刈り払われて幅の広い歩きやすい道に変わる。タイミングよくガスが流れ始め、美しい笠ヶ岳と小笠が姿を現してきた。

樹林帯内の道は幅1メートル以上もあり歩きやすいが、わずかな窪地(水溜り)があると汚れるのを避けるため、登山者の踏み付けにより登山道が左右に3～4メートルも広がっている所が何箇所もあった。このような箇所には登山者への配慮からは木道の設置が望まれるが、樹林帯のため自然への悪影響は少ないように感じました。登

山道を塞ぐ倒木（オオシラビソ）は1箇所のみであった。（写真 笠 7を参照）

最低鞍部までオオシラビソの樹林帯を緩やかな下り道が続き、わずかに登り返すと小笠の肩に出る。小笠の南面に僅かに広がるお花畑の植生は特に荒廃された様子は認められなかった。

最後の樹林帯を抜けると笠ヶ岳山頂基部の東肩の草原に出る。東肩の上り坂の登山道の中央部分は50～60センチメートルほど深くえぐられていた所もある。既に登山道は左右に広がっていた。（写真 笠 1、笠 2を参照）

このまま放置するとやがては、登山者の踏圧による裸地化に加え、雨水や雪解け水による土壌流失が進行し、至仏山と同様に植生が破壊され岩石の露出した登山道になってしまう恐れがある。植生保護の観点からこのように岩石の露出した登山道には「石畳の階段」による左右への拡大防止策が必要である。

笠ヶ岳山頂基部南側のお花畑をトラバースする登山道は、踏み付けられて両側に広がっている箇所もあるが、前回調査と比べて大きな変化は認められなかった。（写真 笠 3を参照）

また、西側から笠ヶ岳山頂へ通じる急斜面の登山道は、その下部のガレ場は崩壊がかなり進んでいて、大小の岩石混じりの砂礫が大量に崩れ落ちていた。この付近が足を取られて一番歩きにくい場所である。（写真 笠 5を参照） この山頂への急斜面の登山道の真ん中に今にも落下しそうな不安定な大岩があった。（写真 笠 4、笠 - 5を参照） 雪解けや大雨の時などには、落下する恐れがあり極めて危険であると感じました。登山者はくれぐれも注意が必要である。落石による事故を防止するために「注意看板」か、大岩を「迂回するコース」が必要である。

この笠ヶ岳山頂一帯は、原生自然が豊富なため群馬県の「笠ヶ岳西面野生動植物保護地区」（昭和52年3月25日）に指定されている。この様にまだ豊かな自然が残っている笠ヶ岳は、至仏山と同様、蛇紋岩特有の高山植物も多い。後世に大切に残しておきたい貴重な自然である。

山頂は360度の大パノラマが楽しめるはずであったが、雨とガスのために展望はなかった。なお、片藤沼への登山道調査は雨天のため中止しました。

．今後の課題と感想

1．入山者増加への対応

至仏山は高山植物の宝庫として、深田久弥の「日本百名山」や田中澄江の「花の百名山」に指定されていて人気が高い。尾瀬は誰でも手軽に行けると思われがちであるが、至仏山の標高は2228メートルで、山の鼻～至仏山の標高差は830メートルもあり、れっきとした山岳地域である。東面登山道は蛇紋岩という硬く滑り易い急傾斜地にコースがあり、スリップや転倒等の事故が多い。植生保護の外に、入山者の事故防止の観点からも、悪天候時には想像を超える危険があることや高齢者や山慣れな

い人には極めて危険なコースであることを、入山者や観光業者に対して更なるPRが必要である。

東面登山道には木製の階段が多数設置されているが、景観や事故防止の両面から石を敷き詰めた（石畳）階段の方がより好ましいと思われます。最終的には入山者の総量を抑制する為に何らかの入山規制が必要である。幸い自然公園法が改正されて、「利用調整地区制度」が創設されたので、その早期適用を切に望みます。

2. 植生復元への対応

東面登山道は急傾斜地に加えてと蛇紋岩という特殊な条件下にあり、雨水による土壌の流失が著しい。流失した土壌の回復と流失防止策を十分にとらないと植生復元は極めて困難である。森林限界周辺の灌木帯から山頂にかけての林床には、背の低い笹が密生している。この笹を植生復元もしくは土壌流失防止用に利用できないであろうか。笠ヶ岳でも既に登山道沿いの植生の荒廃が始まっている。至仏山と同じ過ちを繰り返さないために、行政による定期的な調査とそれに基づく適切な保護策がタイムリーに実施されることを強く望みます。

平成9年の至仏山東面登山道の再開は、入山者を迎え入れることを最優先し、植生の保護及び復元を軽視したものと言わざるを得ないと強く感じました。急傾斜地で裸地化した所は、岩石の露出が年々多くなり、このまま放置しておくとも植生復元は、一層困難になり、回復不可能になる恐れがあります。一刻も早い植生復元への本格的な取り組みを強く訴えたい。

まとめ

今年で8年連続（計10回）となる至仏山東面登山道の実態調査を通じて思うことは、至仏山では急斜面で止まることのない土壌の流失と遅々として進まない植生復元作業など、難しい課題が山積しています。一方、残雪期の登山道閉鎖の継続実行や入山者の減少など明るい動きも見られるが、私達（入山者や全ての関係者）は、この貴重な尾瀬の自然を後世に伝える義務と責任があります。

また、今回2回目の調査となる笠ヶ岳は山頂東面のお花畑の登山道においては、踏み付けによる裸地化や登山道の左右への拡大、さらには山頂直下西側から山頂へ通じる急斜面の登山道では落石の恐れのある大岩の存在や登山道沿いの岩礫の崩壊がかなり進んでいる。

「特別保護地区」並びに「特別天然記念物」の指定を受けている貴重な尾瀬の自然を、これ以上荒廃させてはならない。現在「至仏山保全緊急対策会議」で具体策が検討されているが、至仏山へ自然公園法の改正による「利用調整地区制度」の早期適用を切に望むと共に、尾瀬の生態系を保護することを最優先にした抜本的な対策が、一刻も早く着実に実施されるよう願ってやみません。

以上